

一九〇四年（明治三十七）八月十四日、乃木將軍の率いる第三軍は旅順要塞砲撃のための攻城陣地の確保を完了し、総攻撃のときが熟するのを待つばかりの情勢にあった。

いっぽうヨーロッパにおいても、この十四日から二十日間の予定で、世界中から社会主義を信奉する人々がオランダのアムステルダムに集まり、第二インターナショナルが開かれていた。

ロシア国内の革命勢力を支援していた明石は、この大会に参加するロシアの革命グループの大同団結を呼びかける舞台裏づくりに奔走した。かれらが帝国ロシア打倒で一致すれば、武装蜂起までにいたるあらゆる反体制運動を財政的に支援する用意のあることを、明石は革命勢力の主要な指導者に働きかけたのである。

この大会で、明石は社会民主党の大物、ゲオルギ・プレハーノフと接触をもった。プレハーノフは「ロシアにおけるマルクス主義の父」と称される啓蒙思想家で、一九〇〇年から四年間、レーニンとともにジュネーブを拠点に活動した経歴もある。

第二インターでは、プレハーノフは日本から来た片山潜と共に副議長に選ばれ、両者は戦争反対の演説をしたあと、かたく握手を交わして満場の拍手をあげた。が、この宣伝効果の高い演出にも明石工作の存在を指摘する研究者がいるほど、明石はヨーロッパの反体制勢力に強い影響力をもつまでになっていた。



挿絵 (K. Ohnishi)

しかし、明石の存在が大きくなるいっぽうで、マイナスも生じてきた。ロシア国内の反体制運動の中心勢力と目されていた社会民主党が、革命グループの大同団結には参加しなかったのである。原因は明石から日本の資金が革命勢力へ大量にながれることをプレハーノフが嫌ったためだといわれている。

一九〇四年十月一日、革命勢力の統一集会在パリで開かれたころ、明石はロシア国内の歌劇集団やエスエルとの連携をいっそう深めていく戦略へ転換する。

数日後、ストックホルムの明石のもとへ参謀本部から願ってもない朗報がとどいた。

ソローキンが神戸を発ち、ヨーロッパへ向かったという極秘電報である。出発日は十月一日。アメリカ経由の仏国郵便船で二ヵ月後にはマルセイユへ着く、とあった。

「殉庵日記」には、神戸時代のゆいとソローキンの暮らしを伝える記述はほとんど見あたらない。ただ、ゆいはときおり自分たちの暮らしぶりを手紙にした

ためて高野へ報せていたらしく、日記には二人の動向について、「神戸カラ封書アリ、京都ノ嵐山ヲ愉シム」とか、「堺ノ街ヲ歩ク」など、まるで娘夫婦の新婚生活を思いやる父親のようなメモ書きがある。家族や郷里の人たちとのつながりを断ち切って、ソローキンと共に生きる道をえらびとったゆいにたいして、高野は終生、こうした気持ちを忘れなかった。

ところで、ソローキンが神戸を発った日の高野の記述は主に明石工作と帝国ロシアの政治情勢の分析に費やされている。

このなかでとくに注意を引くことは、この年の七月にエスエル党戦闘団がペテルブルクでロシアの内務大臣プレーヴェを暗殺した事件について、ソローキンが批判的な考えをもっていたことと、プレハーノフの著作を評価している点である。

高野はロシアに革命がおこるとは思っていなかったが、社会主義への理解は深く、ソローキンを単に「日探」として明石のもとへ送るだけではなく、革命家としての成功を心から祈っていることが日記から読みとれるのである。

そして日記にはもうひとつ、注目すべきことが書かれている。ゆいの懐妊である。